「三人目の魔法使い」

某県民

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
「三人目の魔法使い」

【Ｎコード】
Ｎ１９１６Ｚ

【作者名】
某県民

【あらすじ】
自らの想像を外界に反映させる術、魔術。魔術が人を判断する指標となるまでに浸透し、それに依存しきった世界でいきる少年、廓図宣人が魔術高校に入学したときから魔術の上位存在、魔法をめぐる争いが加速する。
「三人目の魔法使い」のリメイク、もといリベンジです。

プロローグ　魔法使い

三人目の魔法使い　プロローグ―魔法使い―

「魔法。」

そんな言葉が現実味を帯びてきたのはいつだっただろうか。

史記によればそれは1世紀ほど前とされている。
当時、地球を滅ぼすといわれた隕石が存在した。
大国が集い何発もの原子爆弾を映画よろしく打ち込んだが、
それでも軌道をまったくと言っていいほど変えなかった超巨大隕石。
人々は本当にまじめな顔をして地球脱出に備え眠れぬ日々を過ごしていた。

その確定的な滅びを地球からそらした。いや。
その滅びをこの世界、宇宙から消してしまった英雄が存在した。

それが最初の魔法使い。
名前は廓図定（くるわずさだめ）。

最初に彼はとある紛争地に突如として現れ、人々の傷をいやした。
現れた時に彼が口にした言葉がある。

「この世界を救う。」

そして彼は自分の特異性の証明のために多数の予言を残した。
それは危険人物の死期や宝くじの当選番号など、
大小さまざまなジャンルに分かれてなされた。

この何とも現実味がない予言の数々に彼をただのめだちたがりだと

評価し批判する人が当時には多数存在したそうだ。

しかし彼の予言は正しかった。

世界で起きる事件。隕石の軌道。
そのすべてが彼の予言のままに動いて行った。

さらに彼には特異な点があった。彼は戸籍を持っていなかったのだ。
彼が現れようと行動を起こした時以外は一切コンタクトをとれなかった。
国を挙げて調査しても返ってくるのは廓図の存在を否定する結果ばかり。

このような様々な不可思議な事項が並びに並び、世界は彼にくぎ付けになった。
人々は言った。彼は魔法使いだと。預言者だと。
一部の人は神としてあがめることさえした。
そして世界中の多くの人々が彼にあこがれた。

しかしある日、彼は言ったそうだ。

「決して私は神ではない。ただのしがない人間だ。
ただ君たちより少し深い世界を観測しているだけだ。
君たちにもいつか見える時が来るだろう。」と。

その言葉の真意はいまだに解明されていない。

そしてこの言葉を残した日、隕石は何の痕跡もなく消滅していた。
当時の隕石の動きをたどっていたレーダー管制官によると
巨大隕石は何の前触れもなしにレーダーから消滅したそうだ。

そしてそれと時を同じくして、隕石と共に廓図定もその消息を絶った。
多くの人間が彼を探した。
しかし世界のどこを探しても彼のいた痕跡は存在しなかった。
当時はこれこそ世界の終りだと恐慌に陥る人々もいたそうだ。

そこまでに廓図は世界に認識されていた。

しかしそんな恐慌もつかの間である。
彼の存在は人々の意識からも本来ありえないほどのスピードで
消滅していった。まるで仕組まれているかのように。
データを消去するかのように。
昨日まで世界が終ると信じ込み、小康状態になっていた人間も
次の日には以前のように過ごすようになった。

誰もが彼の行った神業ともいえる所業に興味を持たなくなった。

痕跡の捜索に興味を示す人間も減っていった。
世界に彼という存在がもとより存在していなかったかのように
改変されていった。それはまるで魔法のように。と当時の人間は語
っていたそうだ。

ならばなぜこの情報が残っているのか。

それは当時唯一記憶の浸食を受けなかった
7人の人間が記録したからである。
彼らは記憶を維持しているほかにも共通点がある。
それは彼の捜索を試みた人間であること。そして出向いた先で謎の
光を観測したこと。
その光の正体と効能は現代の魔術でも大きな到達地点とされている。

そして彼らは覚醒する。

廓図定の技を継ぐ人間として。

しかし彼等の揮(ふる)える術は「魔法」などという人々が望み、憧れた救いの力ではなかった。

その力は七人を通して人を殺害、もしくは淘汰していく力だった。

7人はそれぞれの見地から「人」のためになる行動をとった。

一人は敵国を打ち滅ぼし、一人は一人の女ために国を滅ぼした。彼らは他人のためにといいながら自分のために「魔術」を行使し続けた。

ただ一人の女性を除いては。

その女性は偶然か必然か廓図の名を持っていた。

名を廓図津(つなぎ)奈木。

歴史上の二人目の魔法使いである。

彼女は魔術の利己的な行使によって腐敗した世界を平定した。

彼女以外の6人の魔術師を殺害することで。

そして殺害した魔術師の力を模倣し自分のものにした。

それが彼女の扱える唯一の魔術。それは「投影魔術」であった。

詳しい理論などは一切確認されていないが、

別の文献によると彼女は見たものを理解し、完全に複写できたそうだ。

彼女はそれを6人にわたって行いすべてを自らに投影した。

彼女はその先に見えたそうだ。
物事のすべての源。存在理由を。魔術の上位。魔法の存在を。すべての廓義定の技を。業を。

彼女は自らを「魔法使い」と呼称した。

「魔法使い」そう自称する彼女の顔は常に自嘲的な微笑に包まれていたという。世界は二人目の魔法使いの存在に大いに沸いた。

そんな中、彼女は人々に「魔術」を平等に説き普及した。ゆっくりと。着実に。魔術を通した人間の育成。
一種の宗教的な意味合いを込めて人間を導こうとした。前と同じことは繰り返さないように。

しかし繰り返す、悲劇。リンネ。

彼女は殺害されてしまう。
彼女の弟子たちである魔術師たちに。彼らが動いた理由は簡単だ。
彼女は自分たちを脅かす可能性を持つ上位の存在である唯一の存在
「魔法使い」だったからである。

弟子たちが仲間を引き連れて津奈木を殺害しようと現れた時、
彼女は用意していたかのように言葉を紡いだ。

「殺しなさい。それが私という歯車の存在意義なのだから。世界の加速を彼は望んでいるわ。」

そこからは連鎖的だった。各国家、勢力はすさまじい勢いで魔術を研究、発展させた。

他を出し抜き、圧倒し、支配したい。人類発生当初から受け継がれる黒き願望に導かれ人びとは争いを始めた。
それが今日も続く戦争の発端である。

人間は争いのたびに技術を発展させる。皮肉にも彼女の死が今の技術力の根底をささえ、
人間に繁栄をもたらしている魔術の始まりだった。

たしかに魔術は多くの利益を生み出したが多くの犠牲も生み出している。
世界では今この一瞬でも何千という人々が魔術によって未来を刈り取られているかもしれない。
そしてその争いは今日もその火を小さくはしたものの燃え続け、世界をむしばんでいる。

三人目の魔法使いの到来を期待したいくらいに現実は腐っている。
また同じことを繰り返すかもしれない。争い続けるかもしれない。
それでも願ってしまうほどに世界は無変で、無情で残酷だ。
けれど多くの魔術師たちはいまでも個人のためにその大きすぎる力を振るいつづけている。
魔術は人々に浸透し、人々は魔術に依存した。しかしそんな世の中でも守らなければならないものは確かに存在する。
それを守るためならば俺は喜んでこの力をふるおう。いつだったか、俺はそう決意した。

1―1　あわただしい早朝

まどろみ。心地の良い空間。
誰も好き好んでここから出たいとは思わないだろう。
しかし人間とは稀有なもので自ら設置した機械によって
この空間を破壊するのだ。
まったくもって意味不明で俺にはかけらも理解できない。
もちろんそんな愚かなことをしない俺は完全なる空間でこのまま微睡(まどろみ)を堪能……

「ぴこぴこぴこぴこ」

何かの音が遠くから聞こえる。
セミか？今の季節は春。しかもつい最近春一番が吹いたほどの
春はじめである。さすがにフライングが過ぎる。
こんな時期に求愛しても誰もいないぞ。いや。
そもそもここまで電子音のようには鳴かないか。
ピコピコゼミなんて言うのは俺の知識の中には存在しない。
いたらホラーだ。ということは……

「だれだ！目覚まし時計つけたやつ！」

怒号一発。朝から元気がいい少年が一人。というか俺だった。

「はぁい。おねぇちゃんです！実は今日の入学式が楽しみでたまら
なかった宣人(せんと)へのお祝いを込めて設置しましたっ。今日もかわいい
寝癖だねっ。うーんかわいい」

といって俺の顔を自分の胸に抱え込むようにしてハグする女性が一

人。長い黒髪と藍色の目が特徴的で長身。
その姿は黒い漆に塗り彩られた艶やかな牡丹の飾り物のようだった。
というか姉さんだった。

「何とも目覚めの良い朝だねぇ姉(ねえ)さん。あと俺はそんな運動会前日の小学二年生みたいな心境にはなってないからな」

対して言い返す俺は自分のことをかわいいなどとはかけらも思っていない。確かに線は細いほうであると思うが…。
そういって鏡を見ると髪は漆のような黒で短髪。
寝癖がかかったそれと、大きな瞳は確かに若干の幼さなさを感じさせた。わからなくもない……のか？

「うん。いつも通り宣人がかわいくてね」

俺の精いっぱいの皮肉を込めたひと言と葛藤は姉さんの語尾にハートでも付くのではないかという勢いに一蹴される。
そして姉さんはさらに胸を押し付けるように俺を抱きしめていく。

「うぼがぁ。姉さん。いきで……きない」

俺は人語とは思えないうめき声をあげ、みるみる生気を失っていく。
いまごろ顔色はもはや土色といっても過言ではない色に変化しているだろう。

「あら。姉さんの豊満なバストに感激して息もできないの？宣人君やらしい～。
けどね。そういうのもありだと思うの」

「いや姉さんそこまで胸大き、ぐぼぁ」

何とも子気味の良い音を立ててみぞおちに突き刺さる正拳突き。
抱き合った（？）状況からの正拳突きにもかかわらず、かなりの威力だった。
俺はベッドの上をのた打ち回り悶絶する。

「はい。宣人は事実無根を語ってないでご飯作ってね。仕事に送れちゃうわ」

さきほどみぞおちにこぶしを打ち込んだ人間の言いようでは少なくともない。

「じゃあ自分でつくれ…。何でもないです」

ぎろりと睨まれると俺は渋々であるがみぞおちを抑えながらベッドから這い出る。

「まったく。姉さんも感謝してくれよ。いまどきここまでよくできた弟はいないぞ」

「うんうん。してる。してる」

俺はさらにがっくりとうなだれ、姉さんは満面の笑みでそれを見つめていた。

朝のキッチンは俺にとっては一つのスイッチだ。一日の始まりという明確な区分を俺に与えてくれる。

「今日は時間もなかったからトーストにサラダ。それにオムレツでいいな」

いいながら俺は卵を割ってかき混ぜる。
オムレツの火の通り具合は俺と姉さんで好みが違うので別々に。
俺はまだトロッとした感じが好きだが姉さんはしっかり焼き派だ。
ドレッシングは出来合いのものだがそこは勘弁してほしい。
朝はやはり時間がないのだ。
姉さんが口を開く。

「けどさ。宣人ってなんだかんだいってしっかりやってくれるのよねぇ。
いつもは嫌だとしかいわないのに。ツンデレ？かわいい」

「ツンデレは男がやってもかわいくない。あとご飯はつくるならしっかりやらないと。食材がもったいないからな」

俺の声を聴くと姉さんはしばらく思案し、

「べ、別に宣人のために食べてあげてるわけじゃないんだからねっ」
「「……」」
そのあとは無言であった。

その状況に耐えかねたのか姉さんがわざとらしく咳払いをした。

「ごほん」

その顔は気持ち赤くなっていた。
「そういうことじゃなくてね。
私は別にトーストだけでもいいのに毎回結構立派じゃない。朝ごはん」
リビングからキッチンにいる俺を覗き込む姉さん。
それに見向きもせず、調理途中のオムレツを見つめながら答える。
「じゃあ毎朝トースト焼いて食って仕事行ってください」
「あはは。宣人君厳しいぃ。おねーさんのガラスの心に傷がついちゃう」
「あなたはガラスでも防弾ガラスでしょ。厚さ７ｃｍくらいの」
「さすがに厚すぎじゃないかしら？」
「突っ込みどころはそこですか……」
俺は落胆した。きっと顔には影が落ちている。
今朝の怒号の持ち主とは到底思えない自らの衰弱ぶりに驚くばかりだ。
そんなやり取りをしている間に朝食は完成した。
どれもおいしそうな色合いを放っており、
特にオムレツは我ながら要望通りの絶妙な火加減だった。
「おいしい。やっぱり宣人のオムレツは美味しいわ。
なんでこういう細かいことは得意なのに魔術のほうはからっきしなのかしら…」

眉根にしわを寄せて久方ぶりの真剣な表情を見せる。

「仕方ないな、あれは。
人には向き不向き……ってか姉さんもそこらへんは何となく知ってるだろ？俺の都合というか境遇というか」

むしろ魔術を使えない人間が普通だ、と付け加えかけたがそれは言わないことにした。俺たちはこの身に他人とは違う才を宿したことを自覚しなければならない。

「何となくしか聞かされてないのよね。けどいいじゃない。「大した魔術を使えない大層な「魔術師」頼りになってるわよ。いつも。ほらこないだの事件のときとか。あの時はすごかったわよね。自殺未遂の女の子たすけたやつ」

そんなこともあったかもしれない。正直なところ、姉さん絡みのやっかいごとが後をたたず、心当たりが多すぎるのだ。
トーストをかじる。近くのパン屋はなかなかに質がいい。

「あれは完全にまぐれ。たまたまそこに陣の基礎が敷いてあったからだよ。
だいたい俺が俺の魔力だけ使って風の魔術で地上から5階までひとっとびって無理な話だろ？
俺はそういう系列の魔術が苦手なことぐらい姉さんもしってるはずだ。きっとあの娘がいざという時のために敷いておいたやつだろうさ」

飛び降りようとしている少女を止めるために地上から屋上までひとっ飛び……我ながらよくやるわ。
そしてそれは朝からする話題ではないだろう……。

「うーん。確かにそうなんだけど…。だとしてもそれはそれですごいっていうか……。
だって他人の敷いた陣術を利用するってことは、その構成を理解して……」

何やら考え込んでしまった姉さんをしり目に俺は席を立った。

「はい。この話はおしまい。仕事遅れちゃうぞー」

そういって俺は四角い黒いフレームのメガネをかける。
寝癖が少し気になるが少し整えるぐらいで済ました。

「え！あッやっば。遅れちゃう。お化粧しないと！」

「あ。姉さん今日から初仕事だっけ？がんばってね」

ジト目でいう俺。できるだけ棒読みを心がけよう。

「うんお姉ちゃん頑張る。じゃなくて急がないと！」

急に慌てふためく姉さん。素顔でもかなりの美人であるが
やはり女性として化粧は外せないところなのだろう。
女性というのはわからない。俺はあわて駆け回る姉さんを視界の隅
にとどめながら部屋を出ていった。

「まってよー。私職場行き方知らないー。電車乗れないー」

大人としてはかなり問題なんじゃないかという絶叫が住宅街に響き
渡る。

扉の外でそれを聞き届けた俺は歩き出す。
口元にはわずかに笑みが浮かんでいた。
俺はそれに気が付いていたがそれを隠すことはしなかった。

そして今日も俺は日常を歩く。
俺の家は通う学校まで１０分と掛からないという好立地で
歩く距離などたかが知れている。
しかしこのご時世、歩いている人間はほとんど存在しない。
歩いているように見える人間は少数の魔術師で、魔術を使って「滑っている」だけだし、
多くの一般人は魔術師によって魔術的な処置が施され性能が
大幅に向上した交通機関を利用している。空高くを車がレールなしに走っている。
夜を照らす光にも魔術的な技術が施されている。どんなものにも魔術が絡んでいる。
一般人は魔術的な利益を魔術師たちから提供されているわけだが
どう考えてもそれを提供する魔術師より社会的に劣ってしまう。
そんな状況がまったく違和感なく溶け込んでしまっている。
そして俺はそんな中で当たり前のようにして過ごしている。
しかしそれについてとやかく言う権利は俺にはないのだ。
俺も魔術を行使して生きている側の人間だ。恵まれた人種だ。
この状況を肯定している側の人間だ。
そして魔術がなければ存命すらしていないだろう。
しかしその中でも多くの人に俺は自分のできる精いっぱいのことをしていこう。
かつて俺に魔術を仕込んだ師もそういっていた。

「己のために力を使え。だがその意味、取り違えるなよ」と。

俺は何のために魔術を深く学んでいるのだろう。

自分のためか、いや違うだろう。自分の守りたいもののため。
そのように師は言っていたはずだ。いつしか決意した言葉を思い出し、一歩踏み出す。

「魔術…か」

俺は魔術交通機関に覆われ、
もとの色をほとんど見せなくなってしまった空を少しの間仰ぎ見て、
そして歩き出した。

1―1　あわただしい早朝（後書き）

リメイクとなります。ところどころに手を入れてあります。更新のブランクが大きく空いてしまい申し訳ございませんでした。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n1916z/

「三人目の魔法使い」

2011年12月18日11時46分発行